

# “絵ばなし”に見る五・六才児の視点

額 賀 淳 子

## 「のい

やぎが二匹歩いていたの

ふたりとも橋を渡ったの

「先に行きたい」って一匹のやぎ

が言ったの

それでもう一匹のやぎも

「先に行きたい」って言ったの

けんかしたの

それで水の中におっこっちゃったの

(六才七か月・女)

☆

あのね ふたつ木の橋を渡ろう

としたの

もうひとつのと同じにしようと思

ったの

「通るんだ」ってけんかはじめた

ら

おっこっちゃった

(五才十一か月・女)

☆

こっちから大きいやぎかなんか

来て

こっちから小っちゃいやぎかな

んか来て

ぶつかりそうになったの

それで ぶつかっちゃって海か

なかに

おっこっちゃったの

この子が本当はこっちで待って

ればよかったんだけど…

(六才0か月・女)

☆

橋を渡る時 左からやぎが来て

右からも来て通ろうとして

あっちゃったの

通れなかったの

けんかをしておっこっちゃった

んだって

だって細いじゃない

通れないから

「さがって さがってエノ」

二人で言ったの

(六才七か月・女)

こっちからもこっちからもやぎ

が来てね 歩いて来たの

「ボクの方が先だよ」

「ぼくの方が先だよ」っていつ

たの

おっこちたの (六才三か月・女)

☆

あのねエやぎがね こっちから

もこっちからも二匹来てね

細い橋だから渡れなくてね

すべって落ちちゃったの

だってさア 両方一緒に

(六才三か月・女)

☆

あのね、両方からやぎが来てね

角と角とやりっこして、川に落

ちちゃった

「俺の方が先に行くからどけノ」

って

(五才一〇か月・女)

☆

はじめはこれで その次は ②

⑧④

やぎとやぎが通るんだって

同じところに橋があって そこ

の道しかないんだって

だから けんかになっちゃった

んだって

だから 二人とも川に落っこっ

たんだって (六才七か月・女)

## 「の口

あの ぶつかりあつて、スツテ

ンコ

「お前こそどけよ」

「お前こそどけよ」

だってサー 後にバックすれば

いいのにな どっちかジャンケ

ンポイで (六才五か月・男)

☆

やぎとやぎが

「ぼくが先に渡るんだ」ってけん

かしちゃって 二匹とも、ザブ

ン」と落ちちゃった

(六才十か月・男)

両方いつべんに渡れないから落  
ちちゃった 幅を広くすればち  
ゃんと二人渡れる  
(六才三か月・男)

☆

やぎがふたつ通つたら

「ぼくが先だ」

「ぼくが先だ」って言ってる

どっちかのやぎがおっこっちゃ

ったの (五才十一か月・男)

☆

一本橋を しかが二人いてこう

行つたでしょ こうなるからわ

たれない

どっちも渡れない どっちかが

川におちるの

(五才十一か月・男)

☆

やぎとやぎが丸太んぼの橋を渡

って

それで

「ぼくが先に行くんだ」とかそん

なこと言っちゃって

それでけんかになって、ジャボ

ン」なの (六才一か月・男)

☆

会つたのかな そこでやぎが

「ぼくが先だ」

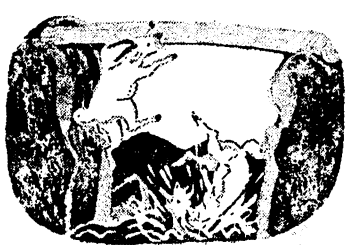
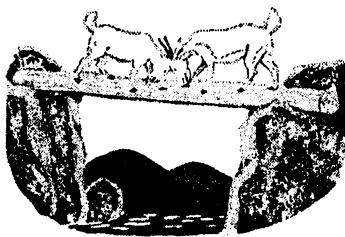
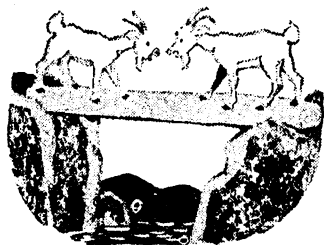
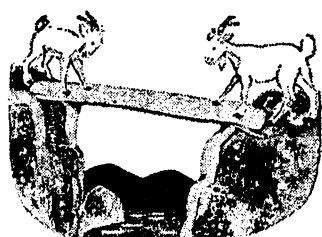
「ぼくが先だ」ってけんかやって

両方ともおっこっちゃったのだ

(六才六か月・男)

☆

えをみて、おはなしをしましょう。



〔右教材は、大日本図書・小学校国語教科書一年生用のもの〕

橋が一本だけなのに二匹のやぎが渡ろうと思つて両方ぶつかつて

けんかになつたの

(六才六か月・男)

### (一)のハ

やぎがね橋でね歩いていたらもうひとりのやぎがね又ね

まずねやぎが来て

にらめっこしてたのね頭と頭

とぶつかつてこつちのやぎが落ちちやつたの

「ちがう」

通るのぶつかつちやつたの細い橋だから二本橋をやるのそうすればよかったのに

(六才八か月・女)

### (二)のイ

さいしよに言うのこれで両方のやぎが歩いて来て

「こんにちわ」って言ったところ

何かしやべっているところ

力くらべしているところ

その時ちよつとすべつて川に落ちちやつた丸木橋だから

△

もうちよつとつなければ

平らな板をやれば

△

だった、どちかが下つてから先に渡してあげたら?

(六才六か月・男)

☆

あのねやぎとやぎの友達が

にらめっこしてごつんこして落ちちやつた

△

あんまりずーつとやってたから

△

足がつかれちやつて

△

どちかがバックしなきゃいけないね

(六才九か月・男)

☆

こつちにいってやぎ二人が橋を渡ろうとしたの正面衝突したらごつんこしてはまっちゃつたの

丸太がすべつて

△

よく見てなかったからじゃ、ないの?

(六才八か月・男)

☆

木の上に乗つてきて二人会つて落ちちやつた木が細いから

でぶつとい橋だったらよかった

△

すれちがいできると思つて通つたんだもん

だつて上手でしょやぎは

(六才三か月・男)

☆

これ一番でしょいま橋を来るところ

にらめっこ

頭と頭とぶつかつて

「ドボン」

△

ここは一方交通だから一人しか歩けない木やなんか二本で平べったい木をくつければ

△

(六才二か月・男)

☆

橋歩いていたらこつちとこつちと会えたの

もうすこしでごつんこしそうになつたの

「ごつんこ」しちやつた

「ぼてん」どしん「じゃぼん」

と入っちゃつた

△

ふたりごつんこしたから

丸い橋でしょひとりじゃ

だいいようぶなんだけどね

(六才四か月・男)

☆

一番はじめに橋を渡つてね途中から下を向いたらおっこ

つちやつたの

△

水のみたから

(六才〇か月・男)

☆

歩いてたんだよそしてね

まん中まで行つて下を向いて

「ダブン!!」とおっこつたんだ

よ

△

重いからだよ二人乗ったから

こつちが重いから、こつちが軽

いから

つかまつてる

これが木につかまつて重いのが

向こうに行つてまた登つて

こつちに来る (六才三か月・男)

☆

おっこったんだよ これ  
けんかしたからだよ  
棒の上なんかでやったからだよ

(六才六か月・男)

## (二) の 口

これが一番でね  
通ろうと思つてけんかしておっ

こつちやつた

ふたりでしょ

△

▽

☆

橋をやぎが通つてんの

落ちちやつた

ぶつかつて落ちちやつた

△

▽

やぎとやぎが ちがう方向行つ  
たらぶつかつた

(五才十か月・男)

☆

橋を渡るところね  
両方渡るところね

向かいあつてね

こつち側のやぎが落ちちやつて

こつち側のやぎが落ちそうにな

つてつめで橋をおさえているの

△

▽

向かいあつたから

(六才〇か月・男)

☆

やぎは木の橋の上で会つたら

一緒になつちやつて 角でけん

かしちやつて、両方とも 橋か

ら落ちちやつたの

(六才六か月・女)

☆

順番わかつた

最初会つたんでしょ

おっこったんでしょ

けんかして

通さないから

他の人がじゃましてたから

橋 細いから (六才八か月・女)

☆

あのね両方から二人やぎが来た

の

一緒にね二人ねやぎが会つたの

それで ぶつかつちやつたの

そしたら片方のやぎがおっこつ

ちやつたの

川に

△

▽

ぶつかつちやつたから

(六才〇か月・女)

## (二) の ハ

じゅんじゅんにやつておくの?

ちよつとまつて

どうして?

何しちやつたの おっこつちや

つてサ

けつとばして落としちやうボク

(六才  
四か月・男)

☆

雲があつて

橋で

渡つてゐるの

ふたりが

「アーアッ」つ

ていつてゐるの

ぶつっんこし

てるの

海におっこつ

ちやつたの

△

▽

ちゃんとか

まつてれば

この人みたい

に

(五才  
十一か月・女)

問題は感じられるが、思うことを

見きわめるために書いてゐるはずだ

のに、わからなくするために書いて

いるような錯覚に陥る。特別に何か

を見つけてやろうなど魂胆は最初か

ら持たなかつた。でも、それだけに

忠実に子どもに近づこうとする時、

わからないことだらけとなつてしま

う。

まず、子どもの話(テーター35枚)を

めくつてみると、それなりに型が見

えて来たことから報告する。それを、

(一)のイ、ロ、ハ、(二)のイ、ロ、ハ、

と分類してみた。それが先に掲げた

ものだが、それぞれの分け方に、何

の異なりも感じられなければ、その

分類は私のひとりよがりな解釈によ

る型分け、ということになる。

私の感じた根拠は、次のようなも

のに基づく。

(一)は十八枚あつて、「一本橋は二

人では渡れない」ということに、イ

メージの主眼をおいてゐるもの。少

なくとも、子どもの話の中でそう見

いだせるものを集めた。やぎの気持

ちをセリフにして表現してゐるもの

とか、理屈として、そのことを説明

してゐる個所から、推察した。

そのうちの

〈イ〉は、四場面をひとつひとつ押

えて流れに沿つた話しをしてゐるも

の、(話し方に、①②③④の区別がつけ

られるものとか、話す際に指で一場面す

つ指して話したもの)つまり場面場面

のつなぎで話が構成されてゐるもの

を集めた。

これに分類されたのは八人で全部

女子。しかし、最後の例なんかは、  
〈イ〉と〈ロ〉の中間にあるものの方  
にも思えるし、きちんとはいかない。  
〈ロ〉は、全体をスーッと見通して  
おいてから印象を単発的にまとめて  
表現した型のものである。だから  
〈イ〉よりもよほど時間の短い(五秒  
くらいで回答するの事もあつた)話と  
なる。これも偶然八人あつて、それ  
が全部男子。分類の後に、数と性を  
見てみたらこうなつただけだが。  
〈イ〉は途中から思考の方向が転換  
してゐる、といつていいのか、イメ  
ージの質が変わつたといつていいの  
か、とにかく一回屈折して、ストー  
リーの本筋といえるべきものにたど  
りついたと思われる例である。これ  
は二人あつて男女一人ずつ。  
〈二〉としては、イソップの言わんと  
してゐる本筋に触れてゐると、はっ  
きりこちらで解せるような箇所の見  
いだせない回答を集めた。  
〈イ〉は、「一本橋」などというこ

とは全然無頓着で、四コマの絵から、自分なりのイメージを湧かせ、(一)にあらわれたようなイメージとは、はつきり内容を異にするものだといふことが回答の中にあらわれているもの。つまり、こちらの意図しているもの。この絵はなしは「このつもり」

というものがあるわけだが、そんなことは一向に感じてくれないで方向ちがいのほうに進んで行っているもの。(だからといって、それらの回答を(一)より劣るとする理由は一つもないが、これが学校で取りあげられる場合は、教材への不適応として好い成績はもらえない。だが本稿での考察は評価についてではなくて、この絵はなしの持つ「このつもり」を子どもたちがどう見定めて行くかを調べることにあつた。

〈ロ〉は、場面ごとの見ただけの羅列的な叙述に終わっているよせ集めの報告で、これだけでは、はたして「橋が一本なのに二人で渡って来てしまったこと」を「こまったことだ」と感じているかどうか察しかねる話しぶりのもの。四コマの絵の変化に対する解説? ということだろうか。男子三、女子三、計六人がこれに属した。

〈ハ〉は、落第点をつけられそうな二人だが、場面の写真的説明にあま

りこだわらずして、そちらに気がまわってしまったため、とても、この絵はなしの持つ「このつもり」に思い至るとは考えられない。特に、後者の女の子の例なんか、「雲があつて」とはじまっている。

計、三十五名(男二十二名、女十三名)の結果が以上であるが、これに名称をつけると、次のようになる。

### (一) 抵抗発見型

〈イ〉 順次発見型

〈ロ〉 見透し型

〈ハ〉 〈イ〉〈ロ〉複合型

### (二) 平和型

〈イ〉 自由型(一)から言えば

方向音痴型

〈ロ〉 見ただけ型(報告型)

〈ハ〉 絵と人との同心型

(一)を抵抗発見型とまとめたのも、仮に、やぎの気持ちをしゃべっている箇所を抜いてみると、

○先に行きたい 先に行きたい

○通るんだ

○さがつて さがつてエ

○ボクのほうが先だよ ボクのほうが先だよ

うが先だよ

○俺のほうが行くからだけ

○お前こそぞけよ お前こそぞけよ

よ

○ボクが先に渡るんだ

○ボクが先だ ボクが先だ(2名)

○ボクが先に行くんだ

○どいてくれ どいてくれ

理屈の通してあるものを抜くと、

(質問する前に自発的に出たもの)

○この子が本当はこつちで待つてればよかったんだだけ

○その道しかないんだって

○二匹来てね 細い橋だから渡れなくてね

○両方いっぺんに渡れないから

○一本ばしを二人いて こう行つたでしよ

○橋が一本だけなのに二匹のやぎが渡ろうと思つて

○細い橋だから

のように、この四コマの絵に仕組まれた難題を、ともかく見て取っていると

と思うからである。抵抗とか難題とか誇張した言い方になったが、話の筋とかテーマとかいふものも、それを感ずる感じないの差によること

だと思われ、電流と抵抗のそれではないが、似たもののよう考えたからである。

それに比べ(二)を平和型としたのは、最初の例などが好例で、出発からして「こんにちば」である。こんなに平和なイメージが浮かんでいたら、一本橋は二人のやぎにとって、

一本であることのほうがありがたいことになる。メロドラマの橋じやないが。次に「何かしゃべっているところ」とある。二人は会いたくて会ったわけで、この子にとっては、「どいてくれ」なんて考えは及びもつかない。「その時ちよつとすべつて」

の「ちよつと」は四コマ目の場面転換が、イソップ童話のような比重を持つていないで、あくまで、「うっかり」程度の比重であることを教えてくれよう。でも、何とか、違う見方、違うイメージの広げ方もあるつていうことをついつい気付かせたくなつて質問もした。

ハすべらないようにするのはどうしたらいいV

すると、もちろん、「退がる」なんてそんな心外な返事はしない。悠々と二人が会えるような橋にすべきだと

して

「もうちよつとつなげれば、平らな板をやれば」

と、橋の工事をすることを申し出る始末。こちらはなおもしつこく

ハこの橋は、一本きりしかなくて、直すこともできないの。今、こつちのやぎは、あつちに行きたくて、あつちのやぎは、こつちに来たいの。どうしたらいいかしらねV

なんて、むりやりこちらの方向に向けてさせて質問すると、彼は自分のイメージとは関係ないけれども、そういうことで困っているなら、解決は簡単、と言わんばかりに、

「だ、つたら、どっちかが退がってから、先に渡してあげたら」

と、いとも涼しい顔で、全くの他所事。この「だつたら」には本当にショックであった。何のことはない。完全な肩すかしと言うほかない。このあたりで、こちらがもう少し考えねばならぬことだったが、次々と屈辱を重ねていくことになる。

「やぎとやぎの友達にらめっこして、ごっこんして落ちちゃった」

少し可能性があると思うから、

△どうして落ちちゃったの△と聞く。ここで「橋が一本きりしかないから」と言ってくればいいものを、

「あんまり、ずーっとやってたから」

と、イメージ転換はおろか、イメージの念の入ったこと。

△どうしてずーっとやってたの△

「そんなことやぎたちに聞いてみなけりゃわからない」とでも言いたそうな顔をして、しばらく黙っているから、

「足がつかれちゃって」

と返事する。進退きわまって、先の能なしの質問をせざるを得なくなる。

「どっちかがバックしなきゃいけないね」

と、同情的に教えてくれた。「いけないね」なんて穏やかな顔で言うくらいだから、一本橋の真中で、わざわざ出かけて来て、やぎとやぎの友だちが、アップアップとにらめっこすることだって考えられる。このタイプはまだあった。

本来、二人(匹)のやぎが会えちゃ、本当はこまるわけだが、のんきに、

「ごつちとごつちと会えたの」と始める。さっきの「こんにちは」にしろ、「友だち」にしろ、「会えたの」にしろ、このように友好的なイメージからは、現代のラッシュ電車の醜さを想わせる「われ先に」のあさましさを笑うイソップの真意など程遠いと言わねばなるまい。でも何でも

かでも、経験の有無に帰そうと言っているのではない。すでに述べたように知っているのだから。ただ、それがこれらの子の関心の的にはならないということである。

ただし、この自由型の中には無責任型も含まれる。

「丸太がすべってはまった」

など言うものだから、これだけでは舌たらずの回答で歯がゆく思われてつい「どこまでわかって言っているのだろう」という気になる。

△どうしてはまったの△と聞き返すと、

「よく見てなかったからじゃないの？」相手が大人数ならば怒り出してもいいところだろう。またこんな例がある。絵の順序に従い、とにかく落っこちた。

△どうして落っこちたの△と、聞かれて、そこで初めて考える。

「水のみたから」

最初にその子が話した始めたことと少しつじつまが合わないが、本人はケロリとしている。こちらもケロリとして、またたずねる。

△落っこちないようにするのにはどうしたらいい△

こんどは自分のイメージの中から方法を見つける。

「岩につかまって、すべっておりでいくの」

……なるほど？ 川に落っこちるのは不本意としても、川に降りることは絶対に必要なわけである。無責任型など名付けるほうこそよっぽど

無責任であって、この子の自分への

忠実さに胸打たれる。その他、いろいろ勝手極まるものがあるが、その子どもの側から見れば、みな自分のイメージに忠実のあまり、自分の関心を確保して譲歩しないということでもある。先の「よく見てなかったからじゃないの？」にしても、その子の関心の外と思えばこそ違いない。

(一)では橋が一本しかないのに、二人がゆずらないで遂に喧嘩に及んだ——つまり喧嘩は手段であるが、(二)の(ヘイ)であらわれる喧嘩はそれが目的となっている。

「けんかしたからだよ」

「棒の上なんかでやったからだよ」と、「わざわざ不安定な棒の上でサーカスみたいな喧嘩をやらずとも、もっと広々としたところですればいいのに」とでも言いたいのかもしれない。

以上は、ずいぶん手こずらされた回答の例であるが、(二)の(ヘイ)よりか質がいいと思う。なぜなら、(ヘイ)のほうはつかみどころがなくて、こちらの質問を上手に食って一応マトを得た結論は出しているわけだが、(ヘイ)のように個性がないというか、(ヘイ)は方向音痴であるけれども、それなりに堂々と自分のイメージを築

いている。しかしヘロは、回答からそれを話す子どもの気分が察せられない。たとえばこんなふうに。

「さいしよ会ったんでしょ」

「おっこったんでしょ」

△どうしておっこったの▽

「けんかして」

△どうして喧嘩したの▽

「通さないから」

△どうして通さないの▽

「他の人が邪魔したから」

△どうして邪魔したの▽

「橋、細いから」

△じゃ、おっこちないようにするのはどうしたらいいの▽

「ひとり後にいて、前にいた人が先

に行つて、前にいた人のほうに行

くんだつたら、この人が前に行く」

こちらは、このように必死で最後

の対策案まで聞き出そうと質問して

いるのに、『もし、そういう必要が

あるならば聞かせてあげてもいい』

程度の無感動さぶりである。この材

料を使うとき、絵ばなしだから、で

きるだけ、パツと一枚の四コマ切れ

の絵を黙って見せて、こちらは何も

言わず、子どもの発言に任せよう

と心がけた。だから、どれの絵から

どの絵につながるかも、子どもに考

えさせたし、途中で口をはさむよう

なことはしなかったつもりだが、これだけは例外で、一番多く質問したし、そうしないと中味が聞き出せなかった。

どの子どもにもした質問は、

「どうすればよかったか」というこ

とだけである。これは(一)の子にも発

した。この質問が、すぐ、一人ずつ渡

るという答えを生むものではない。

というのは、橋を二本架けるとか、橋

を改修して、二人仲好くいっぺんに

渡ろうとする子や、目的が反対方

向というその前提すら崩してしまつ

て、AのやぎにBのやぎがついて行

く、一列に並んで同じ目的地に行く

ようにしてしまふ子もいるからであ

る。だがそうになると、どうしても、次

の質問をしなくなる。前にも書いた、

△この橋は一本きりしかなくて、

今はなおせないの。こっちのやぎは、

あっちに行きたくて、あっちのやぎ

は、こっちに来たいと思つてゐるん

だけど、どうしたらいいかしら▽

ここまで質問すれば、必ずバック

してひとりずつ渡るとする意味のこ

とを言う。こう質問されて、この答

えの出なかった子どもは、ひとりも

いない。

ただ、(一)の子と、(二)の子で違ふの

「待つてました」とばかりにこの質問に答えて安心顔になるが、(二)のほうの子たちは、他人ごとのように答える。何となく、そう問われてみれば、答えはこれしかないけど、はて、そんな質問が、今この際、関係があるのかというふうなふうを示す。せっかく、対策を導き出してあげたのに、また、本人そう答えているのに、なにも満足するような顔に変わつてくれないのである。

さて、この(二)の平和型は、この質

問の答えを質問以前に知つていたの

か知らなかったのかに注がれていた

こちらの関心も大きくこの辺で方向

転換を始めるようである。なぜなら

知つていた知らなかったを、この質

問とこの回答によって得ようとする

愚かさにくすうす気が付いてきたの

である。いったい、知る知らないとい

うのは、その対象を自己が所有し

ているか所有していないかというこ

とと考えられるが、先のように、決

して誘導質問したつもりでもなかつ

たが、結果的には、論理的に畳み込

んで質問して行くと、答がはじき出

されてくる。本人はそれが答だとも

対策だとも思っていないのに、こと

ばの上では出ている。しかしそれで、

知つた、知つていたと言えるかどう

か。ことばの上では、知る知らない

は、その対象を自己が所有するか否

かなどと言えるけれども、やはり、発

見という感動を伴わねば承知できな

いものらしいのである。女性の特有

語「シラナイ」を思い出したが、あ

れは確かに認識に関する用語ではな

く、感情用語であろう。そして、自

分と相手との同関心からの脱出、あ

るいは相手の関心に対する拒否を示

す用語だと思う。つまり、この(二)の

平和型において、知る知らないは、

こちらの質問による回答によって出

る出ないではなくて、すでに、関心

の向けられ方、据え方によって求め

られるものであったと考えられて来

たのである。平和型などと名づけた

のも、絵ばなしをさせておいて、何

かを見ようとしたり、その四コマの

絵に何かを仕掛けておいて、何かを

試そうとしているのに、まことに平

和そのもののタイプという意味であ

った。

ところで、その関心が、関心あると

ころに(本題の場合、示された絵の『つ

もり』)向けられるか向けられないか

の問題はどう考えるべきであらう

か。

こんな面倒なことを言わせるの

も、(一)抵抗発見型のへへ(イヘロ)複

合型)の事例からで、(へ)の例は、出だしのイメージをそのまま進めていけば、(二)平和型の分類に属する運命にあったが、突如として、

「アッ間違えた! 一回」

という発言があり、これから察するところ、イメージの転換があったために、(一)抵抗発見型に入る権利を得たことになる。彼自身が何の助言も誘導もなしに、示された絵の関心あるところ、彼の関心が呼び起こされたのである。このイメージ転換、あるいは焦点設定をもたらずものはいったい何か。

同教科書学習指導書も読んでみた。

「短文のつみかさねで、話をするくせをつける」

「一つの場面についてわかったことを一つずつ話させる」

「各場面ごとにくわしく話させる」

「四つの絵について何がどうしているかをつかませる」

「全体をつなげてすぐわかるようにする」(傍線筆者。同書五十二頁)

けれども、何がどうしているかとか場面の切れ切れの寄せ集めで、それをつなげれば、全体になり、期待したものに合致するというようなものでないことは、先述した通りで

ある。この方法では(二)の平和型を出すばかりであろう。

ただ、

「評価は、話するのに興味を持ったかを観察」

とあるのが救いで、また、指導上の留意点は、

「とにかく、話をする子には、いちいちほめてやることである」

とあるのを見て、そういうことでよいのかとも思ったりしたが、小学校ならぬ幼稚園で、しかも四時間の配当を持つものを、たいていの子どもは、五分もあれば片付くし、それ以上に引き延ばすことは、大変骨の折れることであろうと感心したり、疑問に思ったりした。五秒以内の子ども、三、四人はいたのだから。結局、指導書からは得るところがなかったが、考えてみると本稿でとり上げていることは、この材料の教材的価値の是非論ではなく、その該当年令の引き下げを言おうためでもない。お話をするために用意された材料に違いないし、指導書にもそのための指導方法が書いてあるけれども、一番大事なことは、「お話」そのものについて、子どもたちがどう考えているか——このことが、大勢を決していると言っではいけないのである

うか。

(一)抵抗発見型の(へ)見透し型が、「作りばなしでもいいの?」

と確かめていることを注意したい。

仮想を立てることを知っている子が正解答を得ているということである。他の(一)抵抗発見型の(へ)順次発見型にしても、語尾に、

「(だったん)だ、って、」

の「だ、って」を必ずつけて話す子どもが出て来ている。感覚的な言い方が許されるなら、「(だったん)だ、って」と仮想するから、イメージは円弧を描いてふくらんでいく。ふくらみは、その中心を示唆することがあるのだろうか。

それと反対に、語尾に、「(して)いるところ」の「ところ」を必ずつける子どもは、(二)平和型の(へ)自由型(へ)見ただけ型に見られる

どうしたって、イメージはふとっていかない。ことば数はふえても断片に切り離されている。

「(して)いるところ」というのも一つの話し方とも言えるが、(一)の抵抗発見型の子どもが、仮想を押し立てることによって、四コマの絵を素材化する時、話しが成立するのに比べ、この方は、四コマの絵に追隨する五場となっているから「説明」は生ま

れても、話しとはなっていない。

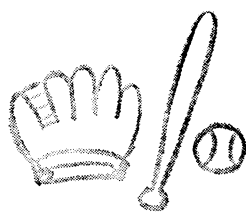
つまり、どんな内容に話をさせるかは、その内容の指導によって得られるとする常識よりも、その話しする姿勢や構え方が決定性を持つと言えようか。

更にこの外廓の姿勢や構えの問題は、連想の性質にも見いだされる。

順調に連想が進んで、ある所で、ぶつりと阻止されたとき、次にどんな連想の方向を見いだすか、この絵ばなしの例で言えば、仕組まれたポイント、すなわち特殊な事件として、それを見なければならぬ連想に加えられた抵抗、あるいは連想の隘路とも言うべき状況下で、子どもがどう対処するかという問題でもあった。

ところが、子どもたちは、連想の隘路ならぬ丸木橋上の二匹のやぎに対して、即座に逆進、転進を命ずることをしない。たいてい、まず「橋が太けりやよかった」とか、「二本あれば」とか、とにかくその場面(やぎが二人角をつき合っている)を変化させないで、間に合わせてしまう。それはちょうど自分の連想の流れに変更をもたらせるのを払うごとくに。

きわどいところのものでも、「一人がそこにしゃがんでまたいで通



(ゆかり文化幼稚園教諭)

る”とか、“はじっこによる”とか、“軽いほうが橋につるさがつて重いほうが行ってから、また登ってきて渡る”という意味のものが多く、もどるよりも橋の方を変えてしまうというんだからおもしろいが、おもしろがることではなくて、姿勢や構えの単一性として見ることであろう。“引き返す”とか“もどる”という考え方はいつごろからどう育って行くものなのであろうか。せいぜい、少しもどっている考えもので、“ひとりだったらよかったんだね、どね。”程度の述懐がある。だが、この例は、案外思考の逆進、転進が、やっぱり順調に前進できないとする嗟嘆の後に、あらわれることを暗示しているのかもしれない。少なくとも崩れかけた構えの単一性にしがみついている感じが私にはする。

## ◇入会の御案内と

### 投稿規定◇

本誌は、幼稚園・小学校の現場人が現場でつくる雑誌ですから、幼・小の先生方ならどなたでも正会員となれます。

現場での御報告・御研究をお寄せ下さい。四〇〇字詰二十五枚以内。ただし、子ども中心のものであるのが本誌の特徴です。採否は編集部にお任せ願います。

ほかに研究会その他を計画致します。

本誌購読者の方々(二年分まとめ)を会友になって頂きますが、原稿掲載は正会員に限ります。

入会御希望の方は

- ① 芳 名
  - ② 御 住 所
  - ③ 勤 務 先
  - ④ 担 当 学 年
  - ⑤ 本年度使用の国語教科書使用出版社名
- を必ずお書き下さり、本年度会費(千円)を添えてお申し込み下さい。

(事務局)

# サカホーニ

# カラーハーモニカ

は  
これからの教育用  
ハーモニカです



製造・発売元

## 日本教育楽器

東京都港区芝土手跡町 4~1  
TEL (431) 1 6 3 1 (代)

## 次 号 予 告

〔秋季刊〕

### 特集

—子どもは、“場”を

どう把えて行くのか—

■“場”の理論と子どもたち(仮題)

都立大学助手 岡田 紀子

■現場の調査と報告

■〔座談会〕子どもの夢を作る

円谷プロダクション  
シナリオライター  
子どもの光編集  
東京少年劇団演出  
金城 哲夫  
郷右近 康人  
旗手 康人

■創刊号合評会記事